琵琶湖の湖底遺跡

湖底遺跡の発見

奥琵琶湖の中央には霊島竹生島に向かって一きわ突き出た岬があります。これが葛籠尾崎です。大正13年12月、この岬の東、水深約60㍍の湖底から大小数個の縄文土器・弥生土器が尾上の漁師の鮒漁の網で引き上げられました。漁とは何も縁のない土器ではありましたが、不思議なものが上がったものよと思われながら、とにかく尾上に持ち帰られたのでした。以後、漁で引き上げられた土器は20数個を数えました。こうした土器をもとに最初に琵琶湖の湖底遺跡を総括的にまとめ世に紹介したのが尾上出身の考古学者、元京都教育大学学長小江慶雄氏でありました。それ以後、琵琶湖湖底遺跡の数も次第に多く知られるようになり、現在では66を数えるほどになっています。ただ、これらの大半は偶然に湖底から土器や石器が引き上げられたため、そこに遺跡があると判断されたものや、土地の伝承にもとづくもので、ほとんど遺跡の実態は判明していないといっても過言ではありません。これは、陸上の遺跡とは違って水底にあるため、容易に調査することができないからです。

湖底遺跡の種類

これまでに知られている湖底遺跡は立地状況からみますと、葛籠尾湖底遺跡のように水深60～70㍍の深湖底にあるものと水深数㍍前後の比較的浅い地点にあるものの二つに大別されますが、大半は浅位部にあり、前者に属するものは葛籠尾湖底遺跡だけです。このため、琵琶湖の湖底遺跡の成因を考えるにはこの２種類の立地条件をもつ遺跡を別々にとらえる必要があります。現時点では調査によって明確にその遺跡の状況や立地を把握できたものはごくわずかで、漁師の網にかかったり、埋立工事などによって偶然に発見されたものが多いため、その成因を探る資料として使えるものはごく限られています。

大中の湖南遺跡

浅位部での湖底遺跡としてすでに詳しく調査され、その実態が判明して現在国の史跡に指定されている安土町大中の湖南遺跡の様子をみてみましょう。

この遺跡は昭和39年、琵琶湖の内湖である大中の湖を干拓している時に発見され、陸化した後に調査したもので、元は水深約 1.2㍍の湖底にあった遺跡です。遺跡は小浜堤上に営まれた弥生中期初頭の集落跡で、約 150㍍

尾上から葛籠尾崎・竹生島を望む

1981. 11. 5

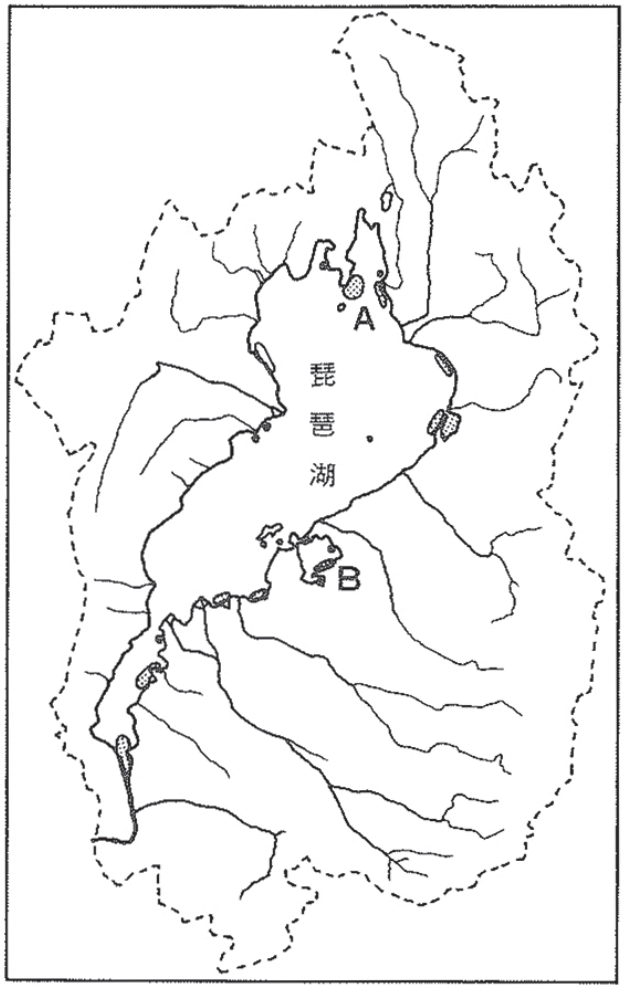
財団法人　滋賀県文化財保護協会

の幅で東西1600㍍にわたって住居地域、水田地域が整然と画された姿で検出されました。水田地域と住居地域の境には、その側辺に杭を打ち込んだ幅７㍍の溝が走り、水田の畦畔には矢板や杭列を用いていました。そして、各種の鍬や鋤などの木製農工具、稲の穂束やそれを穂摘みした石包丁など農耕を示す遺構や遺物が数多く発見されました。また、水辺の農村にふさわしく、舟や櫂、網、貝塚なども検出され、わが国の初期農業集落がきわめて良好な姿で湖底に眠っていることが明らかとなり、私たちを驚かせたのです。

しかし、琵琶湖浅位部の湖底遺跡がすべてこういう遺跡ばかりとはまだいえません。

葛籠尾湖底遺跡

さて、琵琶湖の湖底遺跡の中で最も神秘的なのは何といっても葛籠尾湖底遺跡でしょう。



琵琶湖の主な湖底遺跡
A：葛籠尾湖底遺跡　B：大中の湖南遺跡

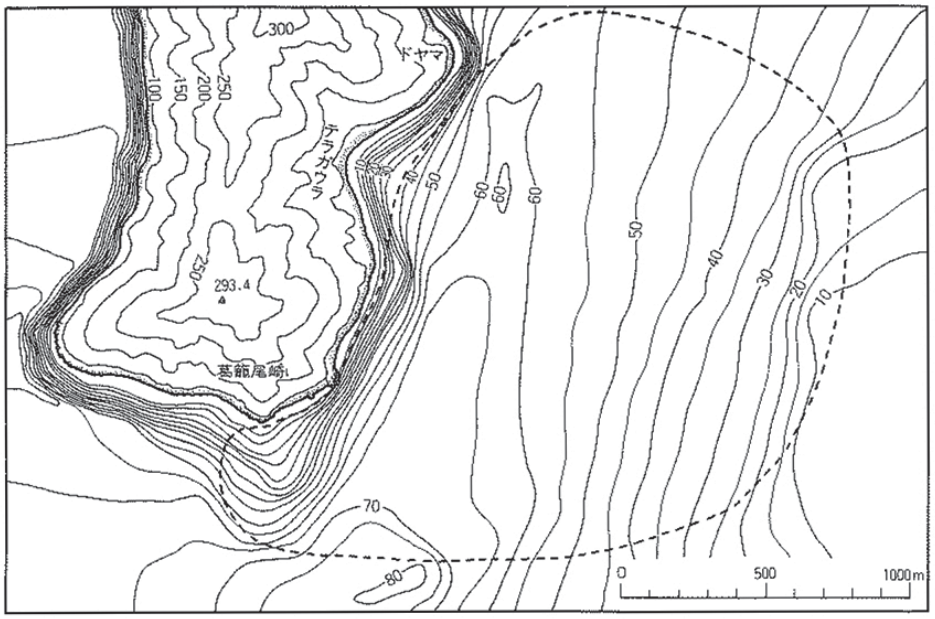
葛籠尾崎のすぐ東側の湖底地形は、岬にそって水深60～80㍍の湖底谷が南北に延び、その湖底谷の西は急峻な崖をなして岬に接し、東はややゆるやかな傾斜で上がって水深10㍍くらいまで上がると傾斜はほとんどなくなりますが、葛籠尾湖底遺跡はこのような湖底にある遺跡です。遺物の採集されるのは、これまでの調査で南北約1600㍍、東西約2000㍍の範囲で、ちょうど湖底谷を中心としてその両斜面が含まれます。発見された遺物は縄文早期の土器、縄文中期～晩期の土器、弥生中期～後期の土器や石器、古墳前期～平安末の土師器・須恵器など約80点で、およそ9000年もの時代幅をもっています。しかも、その大半が完形に近いことが特徴です。

奥琵琶湖の底深く、人間界から遠く隔絶して存在する不可思議な遺跡はいったい何なのでしょう。その成因を探るには、まず、こうした土器がどのような状態で水底に存在しているかを知る必要があります。

普通陸上で発掘調査する場合、土器はきわめてもろいためほとんど割れていて、完形で出土する例はあまりないのですが、葛籠尾湖底遺跡出土の土器が完形に近いことはこの遺跡の謎を解く１つのカギとなります。また、これらの土器すべてには湖成鉄が環状に固着していて、湖底での土器の在り方を知ることができ、これも１つのカギとなります。湖成鉄とは鉄分に富んだ緻密な堆積物塊で、扁平

葛籠尾湖底遺跡と葛籠尾崎東岸

葛籠尾湖底遺跡出土の
縄文土器



葛籠尾湖底遺跡（点線内）と湖底地形
（陸地は標高を、湖底は水深を表わす）

な円形や楕円形、柳葉形、塊状を呈するもの、土器や他の物質に固着したものなど形はさまざまです。これは湖底での水と物体との境に残留的に生成したものと考えられています。土器に固着した湖成鉄の位置は湖底における水と泥との界面を示すもので、これによって湖底での土器の埋没状態を知ることができるのです。これまでに引き上げられた各種の土器を観察してみますと、縄文時代～奈良時代の完形の壺や甕は湖底の泥に２分の１ないし３分の１程埋もれ、正立していたものや横だおしの状態のもの、斜めの姿勢をとっていたものなどがあり、平安時代の土師器の浅い皿はいずれも正立した状態であったことが判ります。また、縄文時代・弥生時代の壺・甕類には比較的分厚く湖成鉄が固着しているのに対し、奈良・平安時代の土師器皿類には膜状に薄く固着している様子もうかがわれます。湖成鉄の湖底での成因条件が一定であり、しかもその固着度の大小が時間的差位に基づくものであるとするならば、縄文・弥生時代の土器は奈良・平安時代の土器より早い時期に湖底に没したと考えられますが、この問題はもう少し湖成鉄の成因についての研究が進んだ段階で検討する必要があります。

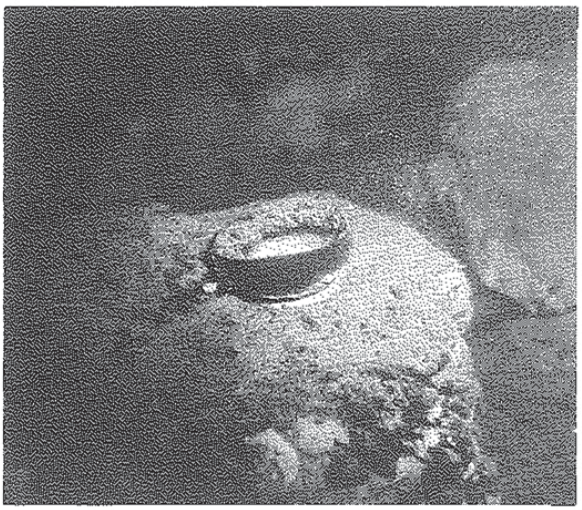
ともあれ、縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の遺物いずれにも湖成鉄が固着している事実は、いずれも湖底の表面に顔を出していることを物語り、陸上におけるように縄文時代から平安時代にいたるまで古い順に下から順次層位的に堆積したのではなく、二次的に埋没したことを示しているといえましょう。

琵琶湖湖底遺跡成立の原因

さて、先にも述べましたように、琵琶湖湖底遺跡には立地からみると２種類考えられ、その成因を考えるにもそれぞれ分けて考える必要があります。

先述の大中の湖南遺跡や昭和48年滋賀県教育委員会の湖岸・湖底遺跡分布調査で発見された新旭町森浜湖底遺跡や湖北町延勝寺湖底遺跡などの浅位部での湖底遺跡は、地盤が沈下したという見方や水位が上昇したとする見解、両者が複合して水面下に没したとみる考え方がありますが、いずれも科学的・実証的裏付けがなく、なお明解な解答は得られていません。ただ、これらの遺跡の立地する地域には黒色有機質のスクモ層が横たわっており、地下水面の低下によって脱水沈下する率が比較的高いことが立証されていて、地盤沈下を検討する上で見のがせない問題といえます。

葛籠尾湖底遺跡のアクアラング調査



葛籠尾湖底遺跡の土器埋没状況

また、琵琶湖周辺は局地的に現在でもわずかながら地盤変動が継続しているといわれ、こうした面も考慮する必要があります。

しかし、水深70㍍の湖底にある葛籠尾湖底遺跡はこのようなわずか数㍍の地盤変動や水位の変化ではとうていその成因を説明することはできません。この遺跡の成因についてはこれまでにいろいろな仮説が出されていますが、それらは次の３つに集約されます。

①地盤沈降説

②奉賽ないし遺棄説

③自然営力による二次堆積説

①については、琵琶湖北部には柳ヶ瀬断層や知内川断層など南北に走る横造線があって、地盤変動の起こりやすい地域ですが、遺跡の最も新しい時代の土器は平安時代のものであるため、平安時代以後において70㍍以上もの大きな地盤変動があったとしなければなりません。しかし、これはとうてい考えられないとされています。

②については、遺跡の近くには古代からの信仰の霊場竹生島があって、湖神への供儀として一定湖域への土器類の投下も考えられないではありません。しかし、発見されている遺物にはいわゆる祭祀遺物は何ら見出されず、磨製石剣や石斧、鹿角製品なども含まれていて祭祀遺物とはほど遠いものばかりです。また、仮に湖上祭祀の風習があったとしても、縄文早期から平安時代まで約9000年もの間生活様式がさまざまに変化する中で何ら形式を変えず同じ信仰・習俗が継続したとは考えられないといわれます。

③の見解は、これらの遺物が湖流によって遺跡立地の可能な東方約 3.2㌔の尾上付近か北方約 7.5㌔の塩津方面から運ばれてきたとする見方、あるいは現状からは遺跡の立地の全く考えられない葛籠尾崎の東岸にかつて遺跡が在って、再三の水位の上昇によって浸蝕され、遺跡が徐々に解体して湖底に遺物が浮遊しながらたどり着いたとする見解です。しかし、湖底の流勢はほとんどなく、あったとしてもわずかな砂塵を動かせる程度のもので、完形に近い土器や石器を移動させることは全く不可能なことと考えられます。また、葛籠尾崎東岸からその遺物のある湖底谷へはきわめて傾斜の強い崖で、しかも陸の孤島のごときこの岬に、縄文時代から平安時代にいたる間、人々が生活し続けるだけの平地を求めることもまた困難といえましょう。

このように、琵琶湖湖底遺跡はまだ多くの謎を秘めた遺跡なのです。(林　博通氏提供)

参 考 文 献

小江慶雄『水中考古学研究』昭和42年、水野正好『大中の湖南遺跡調査概要』滋賀県教委昭和42年、林博通『琵琶湖岸・湖底遺跡分布調査概要』滋賀県教委　昭和48年